

HAMON

～自然と生きる人の情報誌～

2025年4月16日 第11号



～目次～

団体紹介①	杜を育む伝統土木設計事務所 大地の再生士 西尾 和隆氏	
	取材者：独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立曽爾青少年自然の家 菱川 裕輝氏	・・・ 1
団体紹介②	唐津の海から世界を元気に！ たいようアウトドア 古川 陽進氏	
	取材者：FREE CAMP 野田 隆太氏	・・・ 2
団体紹介③	一般社団法人あぶくまエヌエスネット 進士 陽平氏	
	取材者：ホールアース自然学校 福島校 校長 和田 祐樹氏	・・・ 3
走林社中プロジェクト紹介	「鳥の目プロジェクト」	
	走林社中 共同主宰 桜井 義維英氏	・・・ 4
大学研究紹介	子ども時代の組織キャンプ経験に関する自伝的記憶	
	東京家政学院大学児童学科助教 佐藤 冬果氏	・・・ 5
コラム一滴	23年目の30泊31日キャンプを迎えるにあたり思う事！	
	ハローウッズ 森のプロデューサー 崎野 隆一郎氏	・・・ 6
編集コラム	走林社中の終わり方	
	走林社中 共同主宰 小澤 潤平氏	・・・ 7
編集後記	HAMON プロジェクトメンバーより	・・・ 8

団体紹介①

杜を育む伝統土木設計事務所

代表

大地の再生 関西支部

大地の再生士

にしお
西尾かずたか
和隆氏

自然が生んだ、自然を愛する人

【大地の再生】という言葉をご存じでしょうか。地上・地中の空気と水の流れをよくして、自然が本来もつ機能を生かし、環境を再生する手法です。

▼大地の再生の目線

ナラ枯れを見ると、根底にある原因は菌の感染ではないとみます。西尾さんによれば、「雨が大地に浸透せずに、根っこが酸欠になり、木の生育が悪く、木のバリア機能の物質・フイトンチッドが減り、有害な菌などから身を守れなくなった結果だ」といいます。大地の再生で、〈雨が浸透するための入口〉〈染み出る出口〉〈地表の通り道〉を作り、土中環境を整え、根っこの酸欠を解消すれば、改善できると思います。

▼自然と共生する社会

二〇二〇年から普段の仕事に加え、大地の再生士として活動が続いています。近代土木によって、『人目線』の安全を優先したコンクリートで固められる自然を見て「残念だ」といいます。へそこにいて気持ちの良い自然を残すためには、木や草花が生き生きと暮らしていける『自然目線』の環境整備が必要。

大地の再生講座の様子

奈良県王寺町 陽楽の森

大地の再生士
西尾 和隆氏

自然と共生する社会を目指し、自身の活動をとおり、「百年続く気持ちのいい杜を残していきたい」と語ります。大地の再生を始めて、今も活動を続けているのは、ネパールで出会ったヒマラヤの美しい自然と自然農法の農家で働いていたことがきっかけ。それが西尾さんの原体験であり、自然に触れる楽しさ、美しさを取り戻す喜びが原動力になっているようでした。私たちが、子どもたちに届けるプロダクト（自然体験）も、こうした「自然を愛し、行動する人材」が生まれてくることをイメージし、願いを込めて創っていききたいものです。

国立曽爾青少年自然の家

Instagram: <https://x.gd/a07nu>▼取材者：菱川 裕輝氏
ひしかわ ゆうき独立行政法人 国立青少年教育振興機構
国立曽爾青少年自然の家

愛知県出身。大学を卒業後、三

重県立鈴鹿青少年センターに勤務。その後、青少年教育振興機構

で、富山↓高知↓東京と異動し、

現在奈良県にある国立曽爾青少年自然の家に勤務。施設運営と教育事業をしながら、日々体験活動

を利用者に提供している。

自身の子どもを森のようちえん

に通園させており、その園の森の

整備した際に、西尾氏、大地の再

生と出会う。大地の再生は、〈自

然に直接コミットできる〉と

可能性を感じ、自施設の環境整備

に大地の再生を取り入れ始める。

団体紹介② たいようアウトドア

代表 古川ふるかわ 陽進ようしん氏

唐津の海から世界を元気に！

今回は佐賀県唐津市を中心に「唐津の海から世界を元気に！」をコンセプトに活動しているたいようアウトドアの古川陽進氏にお話を伺った。

▼なぜ唐津に？

古川氏は全国を舞台に活動した後、地元である唐津に拠点を移した。「北海道や四国、神奈川でも活動しましたが、唐津はまだアウトドアのフィールドとして手付かずの部分が多かったんです。釣り人やサーファーはいるけど、それ以外のアウトドアの楽しみ方が広がっていなかったのがもったいないと思ったんです」。一度外に出たからこそ唐津のポテンシャルの高さに改めて気づいた。「『これをやったら面白いだろうな』『あれもできるし、これもできるな』と考え続けていましたね」。豊かな自然と、まだ開拓されていないフィールドに、無限の可能性を感じた。

▼ラフティングのプロ選手時代は？

関東の企業が運営するラフティングチームにプロとして所属し、四年間トレーニングと大会に明け暮れていた。プロ選手時代は、選手間の競争やプレッシャーは常にあり、より良い環境を

求める思いと、チームメンバーとの関係構築の難しさも感じていた。「監督と選手の間立つ中間管理職のようなキャプテンというポジションだったので、技術だけでなく、人間関係の構築も求められました」。国際大会に出るための選抜大会は年に一度。二〇一一年には世界大会で優勝を果たしたが、その後メンバーの入れ替えもあり、二〇一四年の大会を最後に現役を引退した。

▼起業して一〇年の成果と今後の展望

起業して一〇年。「地元ではあるけれど、長く離れていたため“よそ者”の感覚もありました」。商工会に入り、人脈を広げながら地域に溶け込んでいった。古川氏は「唐津には面白い人がたくさんいます。最初はプレイヤーがほとんどいなかったアウトドアガイドツアーの業界も、今では隣の福岡にあるFREE CAMPとつながったり、唐津市内にもガイド仲間が少しずつ増えてきました」と語る。アウトドアガイドが生計を立てることの難しさにも触れつつ、地域との連携や新たな展開に意欲を見せる。「実は農業に注目しています！遊びながら楽しめる仕組みを作りたいですね」と展望を語る。これからの唐津が楽しみだ。



上：古川さん／下：唐津の美しい海



▼取材者..野田のだ 隆太りゅうた氏

FREE CAMP（フリーキャンプ）代

表。福岡を拠点に大学生を巻き込みながら、週末の子ども自然体験プログラムやサマーキャンプなどを実施。近年は平日に、「毎日外遊び」のオルタナティブスクールも開校中。おもしろい大人が育つ地域コミュニティを目指している。参加費を出せしめたら支払えばOKな「出世払い制度」や社員は一ヶ月旅に出なければいけない「修行の旅」など、おもしろく経営することに挑戦中。



団体紹介③ 一般社団法人あぶくまエヌエスネット

進士 しんし 陽平氏 ようへい

創業夫妻からつなげる

福島県東白川郡鮫川村の里山にある自然学校「一般社団法人あぶくまエヌエスネット」。今回はその創業夫妻である進士徹さん・由美子さんの長男として生まれ育った陽平さんのこれまでとこれからをご紹介します。

▼農業への関心ゼロからの転機

幼少期から里山に囲まれて育ったものの、全く興味がなかった。長期休みでもどこにも連れて行ってもらえないことが不満でした。高校進学と同時に親元を離れ、神奈川県での大学生活、大学卒業後に行ったオーストラリア生活で都市の喧騒を経験し、故郷の自然の良さに気付いたものの、まだ見ぬ新たな進路を模索していた最中にコロナが流行しました。仕方なく戻った実家で、はじめて自身でイチから育ててみた人参を、美味しいと喜んでもらった経験が奥深い農業にのめりこむきっかけでした。

▼試行錯誤の農業と地域とのつながり

最初は「肥料を多く入れればいい作物ができる」と安易に考えていたら、失敗続きで、気候や土壌とのバランスが重要であると学びました。特に、

お米が収穫間際になって色が変わり病気になるってしまつた経験は自分にとって衝撃の大きかったことです。

「農業は毎々が一年生」という言葉を聞いてから、常にある自分達なりの方法を模索し続けています。近年は、自分の育った環境を守りたいと思い、鮫川村の若手農家チーム「さめがわプライド」に参加。村のオーガニックビレッジ宣言を機に、有機農業を広げ、給食への供給など新たな取り組みを進めています。

▼これからの展望―農業と教育の融合へ

農業に軸足を置きつつ、自然体験学校も続けて農業の魅力伝えていきたいです。特に、不登校の子ども達を対象にした宿泊型のフリースクールのような、自然の中での学びや体験の場を提供したい。自身も家を離れたことで親のありがたみに気付いたように、子ども達にも「日常とは異なる環境」での経験を通じ、新たな気づきを得てもらいたい。農業と教育を融合させ、自分が生まれ育った鮫川村を未来につなげるための活動を広げていきます。



一般社団法人

あぶくまエヌエスネット

<https://abukumansnet.org/>

▼取材者：和田 祐樹

ホールアース自然学校福島校

東日本大震災の後、地元福島に戻り設立準備室長を経て、福島校を設立。自然から離されてしまう子ども達に寄り添い、キャンプ活動を中心に展開してきた。

自然体験分野のみならず、経済・伝統・学校・地域など、境界を越えた連携や協同を大切に、2019年から県立小中学校の探究活動のカリキュラムづくりや地域コーディネート、国立大学法人福島大学の連携教員を勤めるなど、活動の幅は広い。

2024年春から郡山市少年湖畔の村の指定管理を開始した。



走林社中 プロジェクト紹介 鳥の目プロジェクト

自然体験の関係者に社会とのかかわりをきちんと考えてほしいと思っています。

走林社中設立当時にメンバーと社会と自然体験のかかわりを考えて鳥観図を作りました。

この鳥観図で、自然体験と社会との関係や、その中で自然体験が担わなくてはいけない役割や、私たちが担わなくてはならないことは何かを見える化することができました。

参加者は、自分がなくてはいけない社会的役割を自覚することができたと思います。

それから八年余りが過ぎ、コロナを経て、社会の様子も大きく変わり、自然体験の役割もずいぶんと変化したのではないかと思います。

そこで、二回にわたって、集合研修とオンラインのハイブリットで研修会を行いました。

一回目は地域を中心に据えて考えました。

二回目は全国を視野に考えました。

内容は二回とも以下のような流れを考えました。

一、コロナ後の社会はどうなっているかを見つめなおします。社会は大きく変化しています。毎日を通じてと慣れてしまい、気づかないことも多いのですが、きちんと何が変化し何が変化していないかを整理しました。

二、その社会と自然体験はどのようなにかかわっていくべきかを考えました。

変わった社会の中で自然体験の役割を改めて確認しました。

三、最後に、各人の役割を再認識してもらいました。

自分は何をしていけばいいのか、しっかり整理して自覚してもらいました。



集合研修とオンラインのハイブリット開催（八ヶ岳にて）



走林共同主宰

桜井義維英（さくらいよしえ）

現在は走林社中を主宰しています。

プロフィールは下記URLで

電子名刺を取得いただきご確認ください。

<https://my.prairie.cards/u/sakurai>

冊子印刷一般・自費出版ご相談受承ります。

<http://www.sankyo-sha.jp/>

株式会社 三協社

〒164-0011 東京都中野区中央4-8-9

TEL 03 (3383) 7281

担当 高橋 司郎

大学研究紹介

子ども時代の組織キャンプ経験に関する自伝的記憶

小学2年生の夏休み。初めて親元を離れ、4泊5日のキャンプに参加しました。全てが楽しくキャンプにドはまりした私は、それ以降、毎年「夏休みはキャンプ！」という子ども時代を過ごしました。

大人になった今、「キャンプ経験

が今の自分の礎だな」と感じています。また皆様の中にも、キャンプ

指導にあたられるなかで「子ども達にとってこの体験は、(今すぐに

どうこうとは言えずとも)きつと将来のどこかで意味を持つだろう」

と感じる方も居られるのではない

でしょうか。この「年月を経たからこそ見えてくるキャンプ体験の意

味」を追求したいと思い、取り組んだのが「キャンプの記憶」の研究です。

過去の経験が後の人生にもたらす影響に関する研究方法の一つに

「自伝的記憶」という考え方があります。自伝的記憶は、個人がそれ

までに経験した出来事に関する記

憶です。人は、記憶を想起するとき、単に思い出すだけでなく、その出来事を解釈・評価したり、他の記憶や現在の自分と結び付けたりします。このように、記憶を再構成して意味づける過程は「自伝的推論」と呼ばれます。

では、キャンプの思い出(自伝的

記憶)は、どのように保持され、自伝的推論がされているのでしょうか。子ども時代にキャンプに参加

した経験を持つ成人約200名に調査を行った結果を簡単に紹介します。

① キャンプファイヤーや登山、仲間・指導者との関わりは、年月

を経ても記憶に残りやすい。特に「達成体験」の記憶は、他と

比較して、より頻繁に想起され、

より鮮明に記憶され、より重要な記憶であると評価されていた。

② 約8割の人がキャンプ経験から何らかの影響を受けている

と回答し、自己形成、対人関係、自然への認識、野外活動への興味関心、進路・職業選択など、多様な影響が挙げられた。

③ 年齢を重ねると、キャンプの記憶をより重要だと評価してい

た(キャンプ直後には認識されなかった影響に気付く)。

ここでは一部のご紹介に留まっていますので、もしご興味をお持ち頂けましたら、お気軽にご連絡

ください。

▼寄稿者：佐藤冬果

(Fuyuka Saro)

東京家政学院大学児童学科助教

筑波大学で森林の生態(学部時代)、子どもの野外教育(修士)

、大学体育における野外運動(博士)を学び、2021年度より現

職。地域の子どもを対象とした

「森のようちえん」活動を、将来

の保育者・教員となる学生達と奮

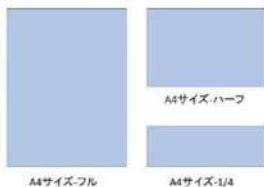
闘しながら企画・運営している。



広告スポンサー大募集

10,000円から広告スポンサーになることができます。

お問合せはこちらのメールに、「広告スポンサー希望」と明記の上ご連絡ください。



A4サイズ-フル	4万円(税込)
A4サイズ-ハーフ	2万円(税込)
A4サイズ-1/4	1万円(税込)

年に4回の季刊誌として発行しています。
電子ジャーナル版での発行です。

デザインの入稿、デザイン依頼などは問い合わせをお願いいたします。

速って、担当者より返信いたします。

HAMON編集部



日本を支える人材、けん引する人材を育てる

カラーで！リンクも貼れます！

一滴

コラム

▼寄稿者..

ハローウッズ 森のプロデューサー

崎野 隆一郎氏
さきの りゅういちろう

二三年目の三〇泊三一日キャンプを

迎えるにあたり思う事！

二〇〇二年夏 栃木県茂木町内 モビリティリ
ゾートもてぎ(本田技研工業株式会社所有 敷地面
積六四〇ha 内森林面積四二〇ha)ハローウッ
ズの森で第一回目の三〇泊三一日キャンプを開
催！参加者六名(参加費三〇万円)から毎年夏休
みの開催でスタートし、コロナ禍の中の二〇〇
年キャンプ開催中止以外は連続開催。

今年は七月二五日～八月二四日までの三〇泊三
日の日程で第二三回目のキャンプを参加者二名
(募集開始三〇分で定員オーバー！ 参加費五万
円)で開催予定しております。

本田技研工業株式会社によるハローウッズ設立二
五年目にもなる今年も設立当時から不変のコンセ
プト「子どもの元気と森の元気！」で運営、三〇泊
三一日キャンプ開催直後から本田技研工業株式会
社の担当者に、子どもの元気を数値化し評価してく
ださいと指示され???

二〇〇七年当時は埼玉大学教授(現在は日本体育
大学教授)の野井慎吾さんに出会いキャンプ前二週
間からキャンプ中、キャンプ終了後三〇日間の子ど
も達の様々な心と身体のパターを採取、記録させ

ていただきデータを分析し子どもたちひとりひと
りの心と身体のパターを数値化し評価させていただ
いて現在迄来ております。(子どもたちから得たデー
タを基に朝の起床時間午前六時から四時三〇分に、就
寝時間二時から一九時三〇分～二〇時に大きく変
化、他起床後の森の中三キロランニング等プログラ
ム内容改善!?)

三〇泊三一日キャンプを二三年も続けてこれた第一
の要素はキャンプスタッフが、子どもたちの先生、親
がわり、人生の先輩では無く、同時代を共に生きてい
る仲間として子どもたちと向き合い、何事に対しても
考える人になれ！ 人生は縁と運と心がけ！等、事あ
るごとに語り悩みを共有して来た!?

第二の要素はスケジュールを子どもたちの心と身体
の調子、天候に左右される事を厭わず、常に臆病で逃
げ隠れ出来る出来るスペースを開けて来た事!?

子どもたちの心身の成長に自然体験活動の大切さが問わ
れ続け、その活動を導き手助けする人材の育成も急務
な現在も、立ち止まる事なく活動が続けられる事に感
謝！

崎野隆一郎プロフィール

一九五七年二月一三日生まれ
鹿児島県いちき串木野市出身
ハローウッズ 森のプロデューサー



Marumimi

ミニマルCMS/ホームページプラットフォーム/ECサイト/データベース構築

編集者コラム

走林社中の終わり方

走林社中共同主宰

小澤 潤平氏
おざわ じゅんぺい

走林社中のはじまり

走林社中は二〇一七年に始まった私塾がスタートです。三〇代の自然学校のディレクターが、共同主宰の桜井義雄英氏のもとに集まり、「自然体験活動業界の第一世代が築いてきたものを引き継いで行くために仕事をやる」という趣旨で月に一度集まり議論を始めました。そこで、最初に話したのは「十年間限定の運動体であること」「勉強会に留まらず仕事をする事」「本業があることを承知でワークハードすること」でした。

このことを前提に、二〇二五年三月まで九八年間活動を続けてきました。その過程では、様々なプロジェクトを立ち上げ、軌道に乗ったものもあれば、途中で休止したものもありましたが、HPにあるような様々な影響を業界に与えることができたのではないかと感じています。これも、前提としてきたことを粛々と続けてこられたからだと思います。そして約束していた十年まであと二年となりました。今回は、走林社中の終わり方について、少し述べたいと思います。

これからの2年間

まず、走林社中としての運営は、二〇二七年三月末日をもって、終了することを先にお伝えします。走林社中の活動のほとんどは、幹事を中心とした数名のメンバーによって運営しておりますが、どのプロジェクト

も自走する形が見えてきました。例えば、企業連携プロジェクトについては、日本アウトドアネットワークのプロセスや貧困支援事業などに形を変えて継承されています。オンラインサロン「モモの部屋」についても、毎週の活動を運営スタッフの手によって進めており、かつての幹事全体で運営するという形からは自立した形になっています。いずれのプロジェクトも、二〇二七年三月まで残り二年間、形は変われどこれまでの志は変わらずに、継承していきます。そして残りの二年間では、二つのことに取り組むことにしました。

一つ目は、これまで実施してきた地域ミーティングの全国キャラバンです。過去の開催地は群馬県、千葉県、長野県、三重県、栃木県、宮城県ですが、その他に、未だ行っていない地域を十一ブロックに分けて、現地へ赴き地域ミーティングを計画しています。「モモの部屋」に参画いただいている方にご協力いただき、地域の自然学校、地方議員や行政職員の方、団体職員、企業の担当者等、地域のキーマンとなる方にお越しいただき議論の場をつくらうと考えています。お声がけさせていただく方にご相談させていただきながら進めるので、各地域の特徴の出た地域ミーティングになるはずです。これは、走林社中でチャレンジしている「全国で金太郎飴のような一律の取り組みではない地域」との議論がしたい」という考えに基づいた取り組みです。各地域で、闊達な議論が交わされることを期待しています。

二つ目は、自然体験アンバサダーの発掘です。各地域

には、自然体験を推進している方が数多くいらっしゃいます。そんな方々に走林社中の取り組みの中で数多く出会って来ました。その方を特集した「自然体験アンバサダー〇〇選」という書籍を発刊することにしました。走林社中でつながった方々を中心に、ご連絡をさせていただきまます。各地域の自然体験活動指導者の顔として、自身の活動や地域をPRしていただくためのコンセプトブックとしてもお使いいただけます。そして、紙媒体や電子出版物を予定しています。編集は走林社中が担当します。

走林社中の終わりまで、あと二年間。二つの取組みを進めるとともに、プロジェクトについても引き続き動いていきます。みなさんも、是非この取り組みに参画してほしいと願っています。一人ではできなかったことでしたが、今は多くの仲間と一緒に運動体として動けるようになりました。残り二年、皆さんもご参画ください。

取材者：小澤 潤平氏
おざわ じゅんぺい

NPO法人国際自然大学校未来創造部マネージャー
株式会社ノッツ プロデューサー

走林社中 共同主宰／HAMON編集長

「影響を与え、流れを変える」をミッションに様々なことに首を突っ込んでみたり、みなかったりしている二児の父。



HAMON【編集後記】 —プロジェクトメンバーより—

(谷 慶子)

地方と都市を行ったり来たり。相反する環境を肌で感じています。

さあ、今年度も頑張ろっ！

(徳田 真彦)

別れと出会いの季節。少し寂しい気持ちと新年度に向けた気持ちが同居する不思議な日々です！

そんな気持ちとゆっくり向き合いたいとも思いますが、目の前にはピカピカの新入生たちが…

よし、やるぞ！

(小林 政文)

あっという間に初夏の陽気の沖縄です。

来月には梅雨がスタート。今年度もよろしくお願いします。

最後の編集長後記

タイトルにもある通り、第11号を持って私小澤は、HAMON 編集長を退任することになりました。この場を借りてご挨拶をさせていただきます。皆様、短い間ではございましたが、ありがとうございました。次期編集長は、編集部の谷が務めます。引き続きのご支援、よろしくお願いいたします。

2年半ほどの期間、編集長を務めさせていただきました。立派な編集長はできませんでしたが、自走できる形までは持ってこれたかな、と思っております。これからは、私は走林社中のフィナーレに向けて、自然体験アンバサダーの取材等に注力させていただきますので、引き続きお付き合いいただければと思います。HAMON はまさに、自然体験アンバサダーの発掘の場だと思っております。各地域で尽力されている方が、多くいることを目の当たりにし、これからも引き続き光を当てる HAMON であってほしいと願うとともに、業界に一石を投じ続ける電子ジャーナルであってほしいと思います。これからの HAMON も、どうぞよろしくお願いいたします。

—HAMON— 編集長 小澤 潤平



走林社中
soulin2017.net

発行人：桜井義維英

発行年月日：2025年4月16日 第11号

編集：小澤潤平、谷慶子、徳田真彦、小林政文

次回、第12号の発行は7月16日を予定しています。